

多言語、多文化の共生を目指して：  
 教室外の人・モノ・情報と「つながる」日本語学習  
 HOW TO CONNECT WITH OTHERS, THINGS AND INFORMATION OUTSIDE OF  
 CLASSROOM

朴 智淑 & ナズキアンふみこ, コロンビア大学  
 Jisuk Park & Fumiko Nazikian, Columbia University

## 1. はじめに

多言語、多文化が共生する 21 世紀において、外国語教育においてもグローバル教育の重要性が指摘されている。例えば、外国語教育・学習のガイドラインとして提案された『外国語学習のめやす』(国際文化フォーラム 2012)では、その教育理念を「他者の発見」「自己の発見」「つながりの実現」とし、日本人が隣語である中国語・韓国語を学ぶことは、学習者の自己発見のみならず、東アジア地域の協調・協働関係の実現につながるとしている。

日本と日本隣国とのよき関係構築をめざした「つながり」が今後、双方にとって益々重要になっていくのは必須である。それでは、日本語学習を通じてグローバルな「つながり」を実現するためには何ができるであろうか。本研究では『めやす』に提案された「つながり」の実現をめざし、ポスターセッションプロジェクトを試みた。このプロジェクトは、様々な他者との交流を通じて自分の専門分野の知識を豊かにし、教室外の人・モノ・情報と「つながる」ことを目的として行われた。学習者は興味、関心のあるトピックについて調べ、自分の意見をまとめた原稿を lang8<sup>1</sup>を使って外に発信し、他者と交流をした。その後、他者からのコメントに基づき内容を修正し、ポスター形式で研究内容を発表し意見を交換し合った。最後にプロジェクトのアンケートを行った。

本発表では、特に日本とアジアの関係においてセンシティブな問題を選んだ学生に焦点を置き、プロジェクトを通じ学習者にどのような意識の変化が起こり、どのような「つながり」が起こったかをケース・スタディーとして紹介する。

## 2. 高等教育におけるグローバル化

21 世紀はグローバル社会だと言われているが、グローバル社会とは一体どんな社会だろうか。『外国語学習のめやす』(以下『めやす』とする)は 21 世紀のグローバル社会の特徴として以下の 5 つを挙げている。

- ① グローバル社会 (個人、身近な地域社会・国・広域地域社会・世界がつながっている)
- ② 国境の壁が低くなり、人々は国境を超えて移動し、情報は地域全体で共有されている

<sup>1</sup>外国語学習用に作られた相互添削型ウェブサイト。学習中の言語で文章を書くと、その言語を母国語とするユーザーが添削してくれる外国語学習者のための相互添削型 SNS (ソーシャルネットワーキングサービス)

- ③国家がさまざまな領域で相互依存関係にあり、地球の運命を人類が共有している
- ④国際社会の主体が国家だけではなく、個人の行動がグローバル社会に直接影響を与え、社会の変化が個人に影響を与えている
- ⑤多言語・多文化状況がいたるところで日常化し、国家は唯一の帰属集団ではなく、文化はそれぞれの固有性と多様性を残しつつ、多層化、重層化、共通化が進んでいる 『外国語学習のめやす』（国際文化フォーラム 2012）

21世紀に入り、テクノロジーの発達、インターネットの普及などにより、世界中であらゆる情報が共有されるようになり、コミュニケーションの形態が大きく変わった。こういった社会の変化は教育の現場にも影響を与え、様々な研究者、教育学者たちが「高等教育におけるグローバル化」の必要性について訴えている（Altbach 2006; Philip Altbach, Liz Reisberg and Laura Rumbley 2009）。外国語教育においても、今「21世紀型スキル」の育成が求められており、その重要性が訴えられている。<sup>2</sup>日本語教育の現場でもグローバル化を目指した試みが行なわれている（松井恭子・朴智淑 2014；ナズキアンふみこ 2013；ナズキアンふみこ・朴智淑 2014 など）。外国語学習者がグローバルな視野を持ち、現実の社会で活動するためには、異なる文化的背景を持つ多様な他者と積極的につながることで、相手の考えや意見に影響を与えながら、自己も変容していくことが必要である。

### 3. これからの外国語学習：SNA（ソーシャルネットワーキングアプローチ）

まず、21世紀における外国語教育・学習のガイドラインとして作られた『外国語学習のめやす』について紹介する。『めやす』では、その教育理念として「他者の発見」「自己の発見」「つながりの実現」の三つを掲げ、それに基づいた教育目標を「ことばと文化、グローバル社会の学びを通して、学習者の人間的成長を促し、21世紀に生きる力を育てること」としている。またこの教育理念、教育目標を達成するための具体的な学習目標として「総合的コミュニケーション能力の獲得」を挙げている。以下の概念図はそれをまとめている。

学習目標：3領域 X 3能力 + 3 連繋の概念図

<sup>2</sup> 「外国語学習のめやす」（国際文化フォーラム 2012）では「世界が注目する21世紀型スキル」として Key Competencies, Partnership for 21<sup>st</sup> Century Skills, 21<sup>st</sup> Century Skills を挙げている。

スリー・バイ・スリー・プラス・スリー  
**学習目標: 3領域X3能力+3連繋**

|                        | わかる                 | できる                               | つながる                |
|------------------------|---------------------|-----------------------------------|---------------------|
| 言語                     | A 自他の言語がわかる         | B 学習対象言語を運用できる                    | C 学習対象言語を使って他者とつながる |
| 文化                     | D 自他の文化がわかる         | E 多様な文化を運用できる                     | F 多様な文化的背景をもつ人とつながる |
| グローバル社会                | G グローバル社会の特徴や課題がわかる | H 21世紀型スキル(協働、高度思考、情報活用力)を運用できる + | I グローバル社会とつながる      |
| J 関心・意欲・態度／学習スタイルとつながる |                     |                                   |                     |
| K 既習内容・経験／他教科の内容とつながる  |                     |                                   |                     |
| L 教室の外の人・モノ・情報とつながる    |                     |                                   |                     |

総合的コミュニケーション能力は言語、文化、グローバル社会の3つの領域から構成されている。この3つの領域それぞれにおいて、「わかる（知識理解）」、「できる（技能）」、「つながる（関係性構築）」の三つの能力の達成を目標としている。この3領域X3能力（スリーバイスリー）を養うために、さらに①学習者の関心・意欲・態度・学習スタイル（J）②学習者がすでに学んでいる他教科の内容（K）③現実社会である教室外の人・モノ・情報（L）と連携させることが重要だとしている。

従来の言語教育では主に上の図のABDEにのみ焦点が当てられていたが、この学習のめやすでは新しく「グローバル社会」領域における3つの能力の獲得を目指している。今回報告するプロジェクトは、JKLも取り入れながら、上の概念図のABDEの能力に加え、GHとCFIの育成も目標にして行われた。

『めやす』における「文化」は、広義の文化を意味し、人々の生活様式や行動様式だけでなく、それらの背景にある価値観や考え方、感じ方なども含む。Fの「多様な文化的背景をもつ人とつながる」能力は、異なった文化的背景（宗教、考え方、価値観など）を持つ人とも尊重の念をもって相手の背景にある文化に向き合い、みずからを振り返りながら、関係性を構築していく能力である。また、そうしたつながりを通して、お互いに影響を与え合い、新たな価値観や考え方などを創造したりして多様な他者とつながる力だ。Iの「グローバル社会領域のつながる力」とは、社会の一員であることを実感し、人・モノ・情報に積極的にアクセスし、社会のために自分の能力や知識などを提供して、社会に貢献する力である。以下で、日本とアジアの関係においてセンシティブな問題を選んだケースに焦点をおき、学習者が意見や価値観を異にする相手に対して、どのように「つながり」を試みたか考察する。

#### 4. 実践概要と手順

本プロジェクトは2012年に某アメリカ私立大学の上級日本語（ACTFL中級の中～上級の上）15人を対象に行なわれた。

授業は1コマ70分で、1週間に3回、また、成績全体の10パーセントがこのプロジェクトの成績としてあてられた。このプロジェクトでは、「3つのコミュニケーション・モード」<sup>3</sup>がバランスよく練習できるよう多面的に言語が使えるよう「ポスター発表」という形式を選んだ。

### 3つのコミュニケーション・モード

#### 1. 対人モード（やりとり）

話す・聞く（ポスター発表やクラス発表における交流）

書く・読む（ラング8やブログを通じたやりとり）

#### 2. 解釈モード（理解）

聞く・読む（研究テーマに関する情報の理解、また、その解釈）

#### 3. 提示モード（表現）

話す（ポスター発表、クラス発表）

書く（原稿作成）

活動手順は以下の通りである。

|       |  |   |
|-------|--|---|
| 第1週   | プロジェクトの目的、手順等について説明                          |   |
| 第2-3週 | テーマを決める、アウトライン①をラング8に提出し、フィードバックをし合う／コメントを返す | グローバル社会に関して、最も関心のあるトピックを選ぶ <sup>4</sup> （G: グローバル社会の特徴や課題を理解する）。お互いの作品を良くする為にはどうしたらいいかをクラス全体で考え合う（H: 協働力） |
| 第4週   | プロジェクト評価基準を決める                               | プロジェクトの評価基準をクラスで話し合い決める（H: 協働力）   |
| 第5週   | アウトライン②をラング8にポストする／選んだトピックについて調べて、言葉のリストを作る  | 学習者が最も関心のある内容（J）と他教科で学んだ内容を連繋させることで（K）日本語学習を高めるとともに内容学習を深める   |
| 第6週   | 言葉のリストを覚え、小テストを受ける                           |   |
| 第8週   | ドラフト1をラング8に提出                                | 学習者は高度思考、情報活用能力などを使って（H）調査研究し教室の外   |

<sup>3</sup> 『外国語学習のめやす』（国際文化フォーラム2012）では、21世紀の外国語学習のスタンダード、外国語学習ナショナル・スタンダードプロジェクトを参照にして、「3つのコミュニケーション・モード」を挙げている。

<sup>4</sup> トピックは「宗教」「日韓関係」「災害とソーシャルメディア」「テクノロジーと人間」「尖閣諸島問題」「日本とアメリカの学校教育」等があった。

|        |   |                              |
|--------|---|------------------------------|
|        |   | の情報とつながる (L)                 |
| 第 9 週  | ドラフト 2 提出                                       | ラング 8 を使い教室の外の人とつながる         |
| 第 10 週 | 講師、TA、クラスメートにフィードバックをもらう                        | 意見交換を通して他者とつながる              |
| 第 11 週 | フィードバックをもとに作品を完成させ練習                            |                              |
| 第 12 週 | 発表  | 研究を発表し、意見の交換を行なう等を通して他者とつながる |
| 第 14 週 | 作成した評価基準をもとに自己、他者のプロジェクトを評価。プロジェクトのアンケートとインタビュー |                              |

## 5. つながり (インターラクション)

本プロジェクトは主にドラフト作成 (3 回)、クラスで発表、ポスター発表の 3 段階に分かれるが、それぞれの段階にて多様な他者とのインターラクションがあった。

### ドラフトを書く段階

- ネイティブ・ノンネイティブスピーカー (ラング 8 を通じて)
- 担当講師 (ドラフトにコメント、クラスでの話し合いに参加)
- ティーチング・アシスタント (ドラフトの内容にコメント)
- クラスメート (クラス内で内容、発表の仕方にコメント)

### クラス内発表

- 担当講師 (発表内容、発表の仕方にコメント)
- クラスメート (発表内容、発表の仕方にコメント)

### ポスター発表

- クラスメート
- 日本語のネイティブスピーカー (研究生、日本人大学院生、客員、NY 在住の日本人、日本語講師、TA、NYdeVolunteer (NY 在住の日本人ボランティア団体) のメンバー)
- 日本語のわかるノン・ネイティブスピーカー (East Asian Studies の大学院生、他学年の日本語の学生、他のセクションの 4 年生の学生など)

セクション 5 ではラング 8 において見られたインターラクションを「多様な他者につながる」能力 (F) という観点からみる。

### 5.1. ラング 8 を通じての交流

以下は East Asian Languages and Cultures の歴史専攻の MA の学生 (C) がラング 8 に載せたドラフトの一部だ。「韓国が日本の保護国になった 1905 年から正式に植民地になった 1910 年まで」に焦点をあて、当時韓国に住んでいたカ

ナダ、アメリカ人宣教師が日韓関係当時の状況をどうみていたかということテーマに取り上げ、「歴史の問題については色々な観点がある」ということを知らせたいと書いている。

私が選んだトピックは1905-1910年代、韓国に来て住んでいた宣教師の韓国と日本に対する観点だ。初めてその問題に興味を持った時は、二年前だったかもしれない。私が聞きたい質問は、どうして韓国には、中国とか日本など隣の国と比べ、そんなにキリスト教信者が多いかで、好奇心を持った。それから、色々な歴史の資料を調べて、韓国人と宣教師が近い関係を持ち始めた時は1900年代だということが分かったからその時代を調べると決めた。

面白い点は、実は、韓国は1905年日本の保護国になり、1910年に正式に植民地になった。したがって、その時韓国で宣教をしていた宣教師は難題に直面しなければならなかった。まず、宣教師の目的は教育と医療奉仕などを通して、韓国人をキリスト教信者にすることだった。でも、日本が韓国を占領して自分の政府を立てたから、宣教師らは日本の政府の要求と命令も聞かなければいけない形だった。困る点は、そんな宣教師は、韓国人は日本と日本人に対して嫌悪をあることに気がついた。だから、学者によると、韓国と宣教師と日本の関係はかなり複雑で、様々な観点が存在して、私のポスター作品を見に来た人々が歴史の問題については観点によって、色々な観点があるということを知ることが出来ればいいと思う。

私が調べた宣教師は四人で、James Galeというカナダの宣教師、George Heber Jones、Homer B. Hulbert、Arthur Judson Brownというアメリカの宣教師だ。それらの宣教師を通して西洋の韓国と日本に対する観点は何かとよく分かるし、なぜ違う観点を持ったかもよく見られた。作文では、宣教師の個人的な考え方はなぜ教会代表としての考え方と違うかもよく述べた。

この第一ドラフトに関して以下のようなやり取りがあった。

The screenshot shows a social media thread with three comments and their replies:

- Comment A (A.L., Oct 22, 2012 11:28):** "そうです、日本はわるい国です。日本がいなければ宣教師ももっとがんばることできたです。むかしも医療と教育活動がすごい韓国人はいまでもキリスト教がすばらしいです。" (So, Japan is a bad country. Without Japan, missionaries would have worked even harder. In the past, Korea's medical and educational activities were amazing, and Koreans are still very good at Christianity.)
- Reply C (Lang-#, Oct 22, 2012 11:46):** "そんなことじゃなくて、何かその時、韓国と日本に着いて色々な観点が存在したことを見せたい。実は、多数の宣教師は、韓国の政府と日本のを比べて、日本の方がもっと現代化で、日本が韓国を手伝ってあげば、韓国も現代化を成功出来ると思った。私の自分の意見は、その時代の考え方を調べて分かるのが日本はいいかわるいを論ずることより胎児だと信じているけど、Lさん、私の作文を読んで、ご意見もありがとうございます。" (It's not that, but I want to show that at that time, there were various perspectives on Korea and Japan. In fact, many missionaries compared the Korean government and Japan, and thought that since Japan was more modernized and would help Korea, Korea could successfully modernize. My own opinion is that it's more about arguing whether Japan is good or bad than about the fetus, but I believe that. Thank you for reading my essay and giving your opinion.)
- Comment F (Lang-#, Oct 22, 2012 12:25):** "その思い方には、個人の経験などの影響があるためを受けたから、正しいとか間違いとかは存在しない。" (In that way of thinking, because of the influence of individual experiences, there is no right or wrong.)
- Reply (Lang-#, Oct 22, 2012 12:25):** "確かに色々な考え方があります。" (There are certainly various ideas.)

「そうです。日本はわるい国です。…」というコメントに対して、Cは「そんなことじゃなくて」と否定し、「その時、韓国と日本について色々な観点が存在したことを見せたい。(中略)私の自分の意見は、その時代の考え方を調べて分かるのが日本はよいかわるいを論ずることより胎児(大事だ)だと信じている」

と答えている。学習者Cは、自分が書いたドラフトを読んだA.Lが自分の意図を誤解したということに気付き、客観的立場から自分の研究の意図を述べ、相手の誤解を解き、自分の意見に責任を持つようとしていることがわかる。この学生はプロジェクト後のインタビューで以下のようなコメントをしている。

I was nervous about the presentation because 1) I felt like my topic for the presentation was a politically sensitive topic 2) since I am Korean, the audience might think that I would just argue that the missionaries perceived Japan as evil. As a historian (if I call myself as such) this has never been my intention when approaching historical topic. Luckily, there was no serious political question directed at me, and truly appreciated the sincerity and curiosity of the audience. It turned out that many of them did not have knowledge about the missionaries' activities in Korea (this is not to say that Koreans are familiar with this topic) and asked me questions that were thought-provoking.

学生Cはインタビューにおいて韓国人の自分が政治的にセンシティブなトピックである日韓の歴史に関して発表することが目標言語、または、目標文化を背景にする他者（日本人）にどのように映るか考え緊張したが、日韓関係を研究する研究者として、客観的な立場を保とうと努力したと答えている。これは教室内で限られた相手（クラスメートや担当講師等）のみに発表を行っていたら、体験できない交流だと言える。本プロジェクトを通して「多様な他者」と現実的なコミュニケーションができたからこそ、学習者はこのような緊張感、責任感を感じたと言えるだろう。

## 6. ポスター発表後のアンケート

ここではプロジェクト後に行なったアンケート調べ、学習者の内面にどのような変化が起こったか考察する。ポスターセッションの後、5つの項目についてアンケートを行なったが、ここでは、学生の内面に起こった変化に焦点を当て以下の2点を考察する。

- I. What have you learned through this project? How did your attitude towards studying Japanese change?
- II. Has your ideas or opinion regarding your topic changed through this project? In what way has it changed?

まず、Iの「このプロジェクトを通して何を学んだか。日本語学習にたいして態度が変わったか」という問いに対して、以下のようなコメントがあった。

1. Try to detach myself from what I write to get the essence of it and be able to explain it in casual speech terms.
2. 研究のために複雑や専門な言葉を大量に習得した。日本人の友達にさまざまな意見をもらった。今後日本語に対して学びの情熱も出てきた。
3. I got to experience a bit of what working for a research company in a foreign language might be.

4. This project was very useful in terms of helping me to communicate more complex ideas in Japanese. Although I am comfortable with the material in English, considering the communication of these ideas in Japanese (both in written academic and in spoken) has helped me in focusing on clarity, word-choice, and (hopefully) grammar.
5. I have learned how to come up with answers at the spot and learn to use vocabs in an easier way to convey my thought. My presentation skills improved, and I realized how helpful it is to practice and repeat in learning spoken Japanese.
6. I have learned a lot about the Japanese perspective on this time period. This project made me interested in reading more academic works in Japanese.
7. Through this project I became more comfortable writing in Japanese and receiving peer review. I also discovered that many of the complex ideas I can express in English, I can now also express in Japanese. This gave me more confidence in my writing.
8. 私の修士論文と連想する単語が分かってきました。（例：「表音文字」、「解読」、など）そして、日本語は会話的なことだけではなくもっと複雑なことも伝えられる言語だという責任ができました。
9. I learned a lot about how to effectively present information about a topic I am passionate about in Japanese. I think I also became more comfortable with public speaking in Japanese. Before this, I had never thought I would be able to talk and write in such an academic way in Japanese, and I felt very accomplished after this project.
10. 日本と韓国の関係の歴史と影響について学ぶことができました。これまで以上に、日本について関心があり、勉強を続けたいです。
11. 日本語がまだ下手で、日本語で簡単に説明するのが難しかったです。しかし、難しかったこそ、とってもいい経験でした。このことにあまり興味がないかあまり分からない他人に外国語で教えることによって、一番言いたいことや何を必ず説明しなくては行けないか何を説明しなくてもいいことが分かってきました。やっぱり、このプロジェクトのおかげで、修士論文の一部がもっと明らかにされました。

上記のコメントをまとめると、このプロジェクトを通して、学習者は相手の立場、気持ちを考え日本語を使い、将来どのようなコンテキストで日本語を使うか考える機会となったことが分かる。また、学習者の多くは自分の言いたいことを日本語に置き換え、多様な他者に説明することで、伝えたかったことがよりはっきりし、選んだトピックの内容理解が深まったとも答えている。学習者が最も関心のある内容（J）、すでに他教科で学んだこともある内容（K）を日本語学習と連繋させることで、内容学習がさらに深まり、外国語学習が他教科の内容を補強することにもつながったと言えるだろう。また、複雑な内容を日本語で書く・話すことに対し自信が持てるようになった、日本語を勉強することに対して「情熱、興味」が増したと答えている学生も多い。

次に、IIの「このプロジェクトを通してトピックについての自分の考えや意見が変わったか。もし変わったとしたらどう変わりましたか」という問いに対しては、多くの学生が特に変わらなかったと答えていたが、以下のような答えも得られた。



1. In writing about social media during the March 11<sup>th</sup> disaster, I initially was very supportive of integrating social media into official disaster response. While I still feel this way, in the process of writing I began to think more critically about some of the downsides of using social media in an official capacity, and this became a greater part of my presentation than it had been at the beginning.

2. 全般的に日本を眺める私の見方は変わらなかったが、プロジェクトをしながら、韓流が日本と韓国の政治的な面ではそれほど大きな影響はないということを学びました。

コメント1の学生は最初に災害時のソーシャルメディアに対する使用について肯定的な意見を持っていたが、プロジェクトを通して、その考え方が少しずつ変わり、ソーシャルメディアのデメリットについて批判的に考えるようになったと答えている。また2のコメントからは大きく意見は変わらなかったものの、学習者が新たな発見をしていることがわかる。

以上のアンケートから学生はプロジェクトを通して、様々な人々との交流、つながりを持ち、学生の内面に変化が見られたと言える。

## 7. まとめ

本発表ではグローバル社会における21世紀の外国語教育の目標の一つである「多様な他者とつながる」ことを目指した「ポスター発表プロジェクト」について、実践報告を行なった。学生の作品、プロジェクト後に行なったアンケートで参加した学生の感想等をまとめると、以下にまとめられる。

- グローバル社会の課題を理解した上で、そのトピックについて様々な人とインタラクションを持つことができた
- 日本語（外国語）に置き換え、多様な他者に説明することで、相手の立場、理解、気持ちを考えながら日本語を使う機会となった（“tailoring”）
- 発表の内容、自分の意見に対して責任を持つようになった
- 日本語を勉強することに対して「情熱、興味」が増した
- 教室外の人、もの、情報とつながることで、現実的なコミュニケーションができた
- 他教科と連携することで、学習内容を深めることができた
- 日本語で書く・話す・発表することに対し自信が持てるようになった
- 日本語の上達や日本語による効果的な発表の仕方を学んだと自覚した

### 7-2. 今後の課題

以上でまとめたように、Lang8を通じて学習者と他者の間に有益なつながりが見られたが、多くのやり取りが2、3回で終わっている。またコメントは日本語に関するものは多くあっても、内容についてコメントがつかないこともあった。内容にコメントをもっともらえるようにするためにどうしたらいいか、今後より深いつながりをもつためにはどうしたらいいのかという課題がある。また、学習

者全員が社会とのつながり（I グローバル社会領域のつながる力）を持つことができたか疑問である。本プロジェクトでは2014年からアメリカ在住の日本人のボランティア団体、NYdeVolunteerのメンバーの方にポスター発表を見に来て頂いているが、その後学習者からボランティアを募って、NYdeVolunteerのコミュニティー活動に参加にした。今後さらにこのつながりを深めていければと思う。

最後に、ポスター発表中、学習者と聴衆の間に起こった会話を録音していなかったが、今後「対話」に焦点を置いて、学習者とどんなダイアログがおこったか調べる必要がある。

## 9. 謝辞

本プロジェクトの活動において、さまざまな方に学生との「つながり」にご協力いただきました。また、学生のポスター発表に来てくださったみなさま、TA、先生方、NYdeVolunteerのメンバーのみなさま、どうもありがとうございました。この場を借りてお礼を申し上げます。

## 参考文献

- 国際文化フォーラム(2012)『外国語学習のめやす：高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』
- 松井恭子・朴智淑(2014)「3領域 X 3能力 + 3連繋を指標にしたプロジェクト型学習の実践報告と今後の課題」AATJ 全米日本語教師会年次総会（フィラデルフィア）発表論文
- ナズキアンふみこ(2013)AATJ「グローバル化を目指した日本語教育」AATJ 全米日本語教師会年次総会（サンディエゴ）発表論文
- ナズキアンふみこ・朴智淑(2014)『外国語教育における「21世紀型スキル」の育成』PJPF Proceeding, 99-113.
- Altbach, P. G. (2006). *Globalization and the university: Realities in an unequal world*. The Netherlands: The Springer.
- Philip G. Altbach, Liz Reisberg, and Laura Rumbley (2009). *Trends in Global Higher Education: Tracking an Academic Revolution*. Chestnut Hill, MA: Boston College Center for International Higher Education.